

## ガラテヤ書2章11-21節 「無にしない神の恵み」

### 1A 偽りの行動 11-14

### 2A 律法に対する死 15-21

#### 1B 打ち壊した律法 15-16

#### 2B 御子への信仰 17-21

## 本文

ガラテヤ人への手紙 2 章を開いてください。私たちは今日、2 章の後半部分、11 節から読んでいきたいと思います。パウロがアンティオケに、「モーセの律法に従わなければ救われない」と言った偽教師たちが来たことによって、バルナバやテモテと共にエルサレムに上っていったという話の続きになります。そこで、主だった者たち、すなわちヤコブとペテロとヨハネは、パウロの宣べ伝えていた福音に何一つ付け加えることをせず、むしろ、交わりの印として右手を差し伸べました。このことによって、この福音は人から出てきたものではなく、神からのものであり、かつそれぞれの人々に一致と交わりを与えるものであることが分かります。ただ、召しが異なります。ペテロは主にユダヤ人への使徒であり、パウロは主に異邦人への使徒でした。しかし、同じ福音を信じています。

### 1A 偽りの行動 11-14

そして 11 節に入りますと、なんとパウロがペテロを人々の前で非難するところから始まります。

11 ところが、ケパがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。

ケパはもちろん、ペテロのことです。彼が「アンテオケ」に来ました。アンテオケは、異邦人の多い町であり、そこにある教会にも異邦人の信者が多く集っていました。そこでペテロが、福音に沿っていない偽りの行動を取ったので、面と向かって人々の前で抗議したことがあります。今、ここでパウロは、「人によらない福音」について続けて語っています。パウロは、「しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。(1:8)」と語りました。たとえ自分自身が福音に反することを宣べ伝えていたら、自分自身も呪われるべきであると言いました。なぜなら、語っているのはパウロであっても、その出所は自分ではなく神ご自身だからです。ですから、福音を宣べ伝えるように召されたペテロであっても、その福音に反する行動があれば非難されないといけないということです。もし、このことが福音に基づく意見の違いであれば、そんなことをしてはいけません。愛の原理、相手を尊重する原理があります。しかし、ペテロが取った行動は後に出てきますが、福音の真理が曲げられてしまうという危険だったのです。それでまっすぐ語ったのです。

ペテロは、主によって立てられた使徒であり、福音宣教者です。しかし、神の器だからと言って、無欠ではありませんでした。彼は実に、異邦人にも信仰によって神が救いを与えられることについて啓示を受けた時、それはヨツパの家において、天からの幻を見たことでした。彼は、食べなさいと神に命じられた、風呂敷に入っている動物は、律法によって汚れているものであるから、自分はユダヤ人として決して食べることはできません、と言いました。しかし主は、「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。(使徒 10:15)」と言われました。そんなことが三度あったのです。それからローマの百人隊長コルネリオの家に行って福音を宣べ伝えるように導かれて、きちんとしたユダヤ人は決して行なわなかった、異邦人の家の中に入ると言うことを行なったのです。ですから、ペテロも、異邦人への神の救いについて、過ちを犯しながら悟っていったのでした。

このように、神の器でさえ過ちを犯します。正しいのは神であり、キリストだけです。しかしこのことは逆を言うと、過ちや欠けがあるからといって、その人の全てを否定してはならないということです。主は、そうした欠けのある器を用いられます。そして、その人の宣べ伝えている福音、またその人の教えている御言葉は、正しいのです。もし、人に完全を求めるのであれば、神以外の存在に完全なものを求めていることになり、それこそキリストの福音、信仰による義認に違反することになります。

そして「面と向かって抗議」したと言っています。パウロについては、偽教師たちは必ず彼の背後でパウロを貶めていました。パウロの面前では口を閉ざしていました。しかしパウロは違います。真理に関することであれば、そこには確信があります。公にしなければいけません。もし隠して話しているのであれば、それは自分が真実を語っていないことをむしろ意味します。また、ここにはペテロへの真実な兄弟愛があります。「あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。(箴言 27:5)」真実に愛する時に、むしろあからさまに責めなければいけないことがあります。

12 なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。

ペテロは、アンテオケにおいて異邦人の兄弟たちと食事をしていました。食事というのは、当時、とても重要な意味を持っていました。とても親密な交わりを意味していました。ですからイエス様は、パリサイ人から、「取税人や罪人と食事をしている」と責められたのです。「同じ釜の飯」という言葉があるように、一つのパン、一つの食べ物を分け合うことによって、同じものを互いの体に入ることによって、神秘的に一つになることを意味していました。それで聖餐式というのは、キリストに与ること、また互いにキリストにあって一つになることを意味します。ペテロは、コルネリオの一家が、割礼を受けてもいないのに、福音を聞いて信じて、それで聖霊のバプテスマが与えられている姿を見て、神を信じることによるのみ心が清められるということを知りました。その出来事の後には、異邦人の兄弟姉妹と一緒に食事をするのを、躊躇わなかったのです。

また、異邦人と食事をするという事は、そこに食物規定によれば汚れたものとされている物を食べることにもなります。豚、ひれや鱗の付いていない魚介類など、主がイスラエルの民に汚れていると教えられたものを避けることによって、自分たちが聖なる民であることを示すように教えられていました。しかし今や、キリストが血を流されたことによって、良心から清めを行なってください、その掟もキリストが完成させてくださいました。ですから、ユダヤ人に対してはその習慣を尊重してユダヤ人のように食物規定を守って交わりますが、異邦人に対しては、そのような習慣を強要するようなことがないように、異邦人のようにならないといけません。思い出しますが、ユダヤ人信者の聖書学者が来日するようになった時に、主催者側の迷惑にならないように、食物規定を守らなかったと言っていました。札幌ラーメンをおいしそうに食べたそうです。

しかし、「割礼派」と呼ばれる人々が、エルサレムからアンテオケにやって来ました。割礼を受けて、モーセの律法を守らなければ神の民となることはできない、すなわち救いは得られないと教えていた者たちです。イエスへの信仰を否定しているわけではありません。イエスを信じるだけでなく、その他のことをすることによって神に義と認められると教えていたのです。

パウロは彼らのことを、「ヤコブのところから」と言っています。ここでも再び、ヤコブが最終権威ではなく、神ご自身の啓示が最終権威であることを表しています。

ヤコブ自身は、エルサレムの教会において、公にパウロの宣べ伝えている福音が正しく、神から来たものであることを認めました。そして、エルサレムからアンテオケに言って別のことを教えた者たちについて、こう言っています。「使徒 15:24 私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱したことを聞きました。」ヤコブ自身が、これらの者たちに困っていたのです。ヤコブは、パウロがエルサレムに訪れた時に、「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰にはいつている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。(使徒 21:20)」ヤコブは、イエスを信じる信仰によってのみ義と認められるという真理を信じていましたが、律法をまだ守らないといけないという良心の弱い兄弟たちのいることを気づかって、それでパウロもエルサレムにいる時はしきたりを守り行なうように勧めました。それは救われるためではなく、ユダヤ人につまずきを与えないためでした。しかし、そのような熱心さの中に、こうした偽兄弟たちが紛れ込んでいたのであり、それが教会の中にも入り込んでいたということが実情だったのです。

そして、ペテロが陥った過ちは、「いつの間にかの行動」でありました。「割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。」と言っています。まず、「恐れ」がありました。箴言には、「人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。(箴言 29:25)」とあります。そして、「だんだんと異邦人から身を引き」と言っています。一気に身を引いたのではなく、だんだんと引いていきました。波風を立てないようにしたのです。もしペテロに、「あなたは、信仰によってのみ救われると信じていますよね。」と尋ねたら、もちろんです、と答えることでしょう。

しかし、行ないがそれを否定していたのです。本心ではないですが、恐れたことによって、偽りのない信仰から来る愛を実践しなかったのです(1テモテ 1:5)。

その結果、異邦人から「離れて行った」過ちを犯しています。これでは、異邦人にとってユダヤ教に改宗しなければ、私たちの仲間にはなれませんよ、神の契約の民になることはできず、神の国に入れませんが、と言っているようなものです。異邦人に、信仰以外の律法の行ないを強要することとなったのです。こうやって、異邦人とユダヤ人にあるキリストにある一体、交わりをちぎってしまいました。「エペソ 2:14-15a キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。」律法主義の問題は、このようにキリストにある平和、一つにされたこと、交わりを壊すことに他なりません。分派を造り、分裂を引き起こします。

13 そして、ほかのユダヤ人たちも、彼といっしょに本心を偽った行動をとり、バルナバまでもその偽りの行動に引き込まれてしまいました。

「ほかのユダヤ人たちも」ペテロに引きずられて、偽った行動を取り、そして異邦人宣教において共に働いていた「バルナバまで」がこの行動に引き込まれてしまいました。「空気が読めない」という言葉が日本語として定着して久しいですが、私は、福音の真理の時には「空気を壊す」ことが必要だと考えます。ペテロとその仲間は以前、同じ過ちを犯しました。イエス様が復活された後に、ガリラヤ湖で、「私は漁に行く。」とペテロが言って、それで他の弟子たちも、「私たちもいっしょに行きましょう。」と言いました(ヨハネ 21:3)。これは怖いことです。「何となく」というものによって、私たちが立っているところが福音ではなくなる、偽りとなっているということが十分あり得るからです。

「本心を偽った行動」と言っています。これは、彼らが律法を守り行なうことによって救いを得られるのではないということが本心なのに、あたかも律法を守り行なって義と認められるような動きをしたからです。問題は律法を守っている、守っていないということではありません。そうではなく、義と認められるために、救われるために律法を守ろうとしているのか、そうでないかということです。

14 しかし、彼らが福音の真理についてまっすぐに歩んでいないのを見て、私はみなの前でケパにこう言いました。「あなたは、自分がユダヤ人でありながらユダヤ人のようには生活せず、異邦人のように生活していたのに、どうして異邦人に対して、ユダヤ人の生活を強いるのですか。」

「福音の真理についてまっすぐに歩んでいない」と言っています。真っ直ぐに歩むということが、いかにバランスが必要で、そのために心を使うか知れません。福音の真理に従って歩むことは、まるで細い橋を渡るようなものであり、あるいは綱渡りをするようなものであり、「しっかりと立つ」という行為が必要です。なぜなら、この世界には、神の恵みによる救いというものは教えていないからです。どの宗教も、どの哲学も、どんなものでも、「自分のしていることで自分を救おう」とする教

えを信じているからです。アダムが罪を犯した時にしたことは、いちじくの木の子葉をつづって、裸を隠したことでした。自分で自分の罪から来る恥を隠そうとすることに、世は満ちていますから、その中にいながらにして、福音の真理の中に歩むことは、不断の努力が必要です。パウロは5章1節で、「しっかりと立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」と語っています。

そしてパウロは、ペテロや他のユダヤ人たちの偽り、あるいは偽善を指摘しています。「自分がユダヤ人でありながらユダヤ人のようには生活せず、異邦人のように生活していたのに、どうして異邦人に対して、ユダヤ人の生活を強いるのですか。」ペテロは、エルサレムの会議において、「使徒 15:10 それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの先祖も私たちも負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。」と言いました。自分たちも先祖たちも、律法の要求を満たすことはできませんでした。それゆえに神の恵みによる、信仰によつてのみの救いを信じたのですが、異邦人にそれを負わせようとしていると責めました。

律法主義の特徴は、ここで二つのことが言えます。一つは、「偽善」です。人によく見せる、外見だけを守るという過ちです。もう一つは、「自分自身が守り行なっていないのに、相手に強要すること」があります。キリスト・イエス以外に、何かこれを行なわなければいけないとする時、キリストを信じるそこから流れる神の愛は本物ですから、その命令をそのまま守り行なえますが、そうではないですから、自分自身は行なえていません。それでも、そのことには気づいておらず、他の者たちに行わせようとしています。

## **2A 律法に対する死 15-21**

### **1B 打ち壊した律法 15-16**

15 私たちは、生まれながらのユダヤ人であつて、異邦人のような罪人ではありません。

ここでパウロが言っているのは、外見における「罪人」のことです。イエス様が、パリサイ人たちから、「あなたがたは、取税人や罪人どもといっしょに飲み食いしている。(ルカ 5:30)」と言われましたが、それは神の律法について、守ろうと思っているけれども守れないというよりも、全く度外視した生活を送っていて、ユダヤ人たちもあきらめて、彼らを自分たちの仲間だとみなしていないような範疇の人々のことを言っています。ここでパリサイ人たちはユダヤ人の中の罪人の話をしていますが、ここではさらに侮蔑的な言葉として「罪人」が使われています。かつて旧約聖書では、「無割礼の者ども」という言葉を使って、ペリシテ人に対して戦いましたが、それと似ています。犬どもというような意味合いです。つまり、神を度外視して、全く不道徳で、異教的生活をしている人々のことを指しています。ユダヤ人として生まれきた者たちの多くは、神の律法がありますから、そのような不品行や汚れ、不義から守られて生きてきたのであり、私たちはそのような者たちではないと言っているのです。

つまりこれは、自分はある程度、一般的な社会的規範に則り生きてきた人について言えるでしょ

う。親がおり、ある程度の教育をしてくれて、学校にも通い、特に大きな悪さもせず、比較的まともに生きてきたと言えるような環境にいますと言い換えることができます。

16 しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもないからです。

生まれつきユダヤ人として生きてきて、それで外見では律法の行ないによって生きてきたからといって、それで神に義と認められるのではないということを知っていたからこそ、ペテロは主イエスを自分の救い主、キリストとして信じたはずで、彼はイエス様に出会った時、「ルカ 5:8 主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言いました。イエス様を見て、自分の高ぶりや誇りを示されました。その聖さに触れて罪深さを悟りました。それで、この方が自分を贖われる方だと信じて、彼に付いていったのです。イエスを信じる信仰によって、たとえ彼に欠けがあっても、それでもイエス様は見捨てず、彼を受け入れ、そして神の国に入れるようにしてくださった、義と認めてくださったのです。

ですから、パウロはもう一度繰り返して、「これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。」と言っています。自分たちがどのようにして救われたのかを思い出すことは大切です。自分はただ憐れみによって罪を赦していただいたにすぎない、そして恵みによって今の自分がある。神の子どもとして祝福を受けている、ということです。この、「自分はどうしようもない、救いようもない罪人だけれども、神は救ってくださった。」ということ、その確信が足りない人は、もう一度、キリストの前で罪を認める必要があります。

そして、「律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもない」と言っています。ここでの直訳は、「律法の行ないによって義と認められる肉は、ひとりもない」となっています。ここで大事なことは、私たち人間がみな、アダムから来た子孫だということです。アダムが罪を犯したので、その子孫はみな罪の性質をもって肉体を得ました。「ヨハネ 3:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」ですから、肉によって生まれた者が、神によって命じられることを行なうことはできないのです、不可能であります。

そして「ひとりもない」と強調していますね。何もクリスチャンでなくとも、善良な人たちは数多くいます。しかし、神の義はそのような相対的なものではありません。絶対の、聖なる方がおられて、その方から罪によって引き離されているということにおいては、そのような善良な人であっても、非道徳な人であっても全く同じ所に立っています。

## 2B 御子への信仰 17-21

17 しかし、もし私たちが、キリストにあつて義と認められることを求めながら、私たち自身も罪人であることがわかるのなら、キリストは罪の助成者なのでしょうか。そんなことは絶対にありえないことです。

これは、ユダヤ主義者、律法の行ないによって義と認められると教えている者たちの、パウロの宣べ伝えている福音に対する非難です。パウロたちは、キリストにあつて義と認められることを教えました。しかし、その時には自分たちがより正しくなるのではなく、むしろ神があなたがたを罪人として断罪しておられるというところから教えます。まず、自分が罪人なのだということを知らなければ、キリストがこの世に来られた目的を理解できません。そうやってキリストは、人々を罪人にする働きをしているのか？と非難しているのです。パウロは、それに対して「絶対にありえない」と答えています。

このように、律法主義に陥っている人は、自分を正しくすることが救いの道であると信じているので、自分自身が罪人であることを認めないで偽りし、それだけでなく神やキリストまでも不正であると言って、偽り者とするのです。「1ヨハネ 1:8-10 もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」罪はないと言えば、自分自身を欺いています。そして、罪は犯していないと言えばそれは、私たちは罪人だと言っているのは神ご自身ですから、神ご自身を偽り者としてしまいます。

18 けれども、もし私が前に打ちこわしたものをもう一度建てるなら、私は自分自身を違反者にしてしまうのです。

「前に打ちこわしたもの」というのは、律法の行ないによって義と認められることであります。これについては、打ち壊しました。しかし、ユダヤ主義の問題は、それを「もう一度建てる」ことであります。再び、義と認められるために律法の行ないをしようとする試みです。そうすると、「では、行ないのない信仰でいいのか？」という反論が来ます。「罪を犯したままにさせるではないか。」と言うかもしれません。いいえ、絶対にそんなことではないのです。神の愛、キリストがご自身を捨てたところにある神の愛があつて、そのことを信じている者たちには、神の愛が流れます。そして、心が新たに変わられます。その新たにされた心によって、神の命令を守ります。もはや、正しいと認められるために守ろうとするのではなく、神に愛されているから、神を愛して、神を愛しているから守るのです。そこには聖霊の助けがあり、聖霊の実を結ばせることになります。

もし、「もう一度建てる」ことをしてしまうと、「自分自身を違反者にしてしまう」と言っています。再び律法の行ないによって義と認められようとするものなら、かえって罪の意識が生じて、罪に定め

られてしまうのです。

19 しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。

この逆説的な言葉を知ることが、神の真理を知る時にとても大切になります。神によって生きるためには、神の律法の中に生きなければいけないではないかと思えます。しかし、パウロは逆のことを言いました。神に生きるために、まず自分が律法によって、その違反にとって罪に定められていることを知らないといけません。そして、どんなに頑張っても律法を守り行なおうとしたところで、全く神の義に到達することはできないことを悟る必要があります。何一つ、義と呼ばれるものを行なうことは、この肉からは出てこないことを知る必要があります。

そして、そのことを知った人は、「律法に死」ぬことができます。これは、律法によって神と関係を持つようとする試み、律法による神との関係に死んだということです。ローマ7章では、それを離婚解消で説明しています。律法という夫に対して自分が死ぬことによって、離婚が成立します。そして新たに生きることによって、今度は別の夫、キリストに結ばれるという例えでした。このことによって、つまり律法に対しては死んでいるという立場をしっかりと保つことによって、そこから神に対して生きることができるのです。

ある戦争映画で、上官が部下にこう言ったことがあります。「兵士は、自分が死んだと思って初めて機能できる。」生きようとしている時は、死を恐れて兵士として動いていない、生きていません。生きようすると、死ぬのです。しかし、自分は死んだ者だ、自分は、戦死はまだしていないが、戦死する者なのだともみならず、死んでしまうという恐れから解放されるので、兵士として戦うことができ、生きることができるということです。生きようと思うと死に、死んだともみならず生きるのです。これと霊的には、律法との関係は同じで、律法によって神に対して生きようすると、かえって違反者として神に罪と定められ、律法に対して既に死んでしまったともみならしっていると、初めて神に対して生きることができます。

20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

ここはぜひ暗誦して、口ずさむほどにしたほうがよい、大事な、大事な言葉ですね。律法に対して死んだ者は、今度はキリストに信頼するという生きた関係の中で生きることができます。

まず、自分についての意識、自意識、あるいは自己認識をします。「私はキリストとともに十字架につけられました。」であります。自分というものは、十字架に付けられました。自分がそこで生きよう、生きようとしても、苦しめられて、そして窒息して死にます。キリストが十字架で死なれた時に、

キリストに結ばれた自分、古い人もキリストと共に死んだのです。律法の違反者として、律法によって罰せられたのです。私はもう罪人として罰せられたのです。それを何とかして、正しくしようとしないでください。自分は神の恵みによって救われた罪人であります。

それから、「もはや私が生きているのではなく」と言っています。もちろんこの肉体は生きています。ここで言っているのは、自分の肉、その存在というものです。救われたいと願って生きる力のことです。もう死んだ者ですから、生きていないのです。古いものは過ぎ去りました。

そして、「キリストが私のうちに生きておられる」と言っています。今の命は、もっぱらキリストの命なのです。自分の土の器という肉体の中に、キリストの御霊の水が流されているのです。つまり、私たちは植物人間であり、キリストという生命維持装置によって生き生きと生きているのです。あるいは、海中にいる潜水士でもよいでしょう、自分が生きているのは酸素ボンベというキリストなるお方なのです。キリストとのつながりこそが、自分の命であります。あるいは、「補助輪を外した自転車乗り」とも言えるでしょう。重力のバランスを知ったので、それによって自転車を転倒させずに前進させることができます。ところが、補助輪を再びつけたらどうなるでしょうか？かえって転倒します。これが、キリストを知ったのに、なおのこと律法によって生きようとする人々の姿です。このように、生きているというのは流れているものです。動いているものです。信仰は、ちょうど血液があるだけでは人が生きられないように、血液が流れることによって生きているように、キリストという方に信頼を寄せている流れの中で、その流れがあって初めて生きることができます。

そして、「いま私が、この世に生きているのは」と言っています。これは直訳では、「いま私が、この肉に生きているのは」となっています。私たちが既に死んでいるからといって、自分の肉体を殺すわけではありません。信仰を持つ前と全く同じように、この肉の中に生きています。回心する前のパウロと、その後のパウロは、目も鼻も、足も手も、全く変わりません。けれども、その目をどこに向けるのか、その足を使ってどこに行くのか、手は何のために使うのかが全く変わります。

そして、「神の御子を信じる信仰」によって生きると言っていますが、その信仰というのが、何によって支えられているのかを知ることは死活的です。「私を愛し」とあります。神がこの私を愛しておられる、という単純な真理です。ヨハネ第一には、「神は愛です」とあります。キリストが神の愛をもって私たちを愛された、その愛に触れられて、それでこの方を信頼したいと願います。それから、「私のために」とあります。全人類をキリストは愛されたのですが、その中の一人ではないのです。神が、この私のためにキリストをお与えになったのです。他の人のことはどうでもよく、ただ憐れんで、あなたを愛されたのです。しかもこの、「私のために」というのは、救いようもない罪人である私のためにということです。罪人のために、キリストは命を捨てられました。ここを間違っただけではありません、最も愛されないようなことをしている時に、それでも神が愛だから愛してくださったのです。この愛に触れてください。

そして最後に、「ご自身をお捨てになった」と言っています。犠牲の愛です。ご自分の命を捨てる愛です。だから、この愛をないがしろにできません。平気で罪を犯してしまうのは、この方がどれだけの対価を払って、死んでくださったのかを忘れてしまうからです。私たちが神の命令を守れないのは、自分の頑張りが足りないからではなく、神の愛を知らないからです。

21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。」

「神の恵み」とは、このような死に値する者にこよなく慈しんでくださり、愛してくださり、それで祝福までして下さり、栄光の姿に変えてくださるという神の好意であります。これだけのご好意を、私たちはそのまま受け入れているでしょうか。この無代価の贈り物を、対価をつけて返してしまおうとしていないでしょうか？ 私たち日本人には、お返し文化があります。それは言い換えると、「あなたの好意は負担になります。その負担を和らげたいので、お返しします。」と言っているようなものです。その無条件の愛に対して、煙たがって、それで素直に受け入れて、喜び、感謝していないことです。このようなことをすると、「恵みを無にする」ということになります。

そして、「キリストの死は無意味」と言っていますね。イエス様がゲッセマネの園で、「できますならば、その杯をわたしから取りのけてください。」と祈られましたが、何をもってできますならば、なのでしょう？ もし、その他の方法で、人々が何らかの律法の行ないによって救われるのであれば、神の怒りの杯を取り除けてくださいと願われたのです。しかし、救われないと分かっているから、「あなたの願うようにしてください」とイエス様は祈られて、それで十字架の道を歩まれました。あのむごたらしい十字架、ご自分の子を死に定めるといふとんでもないことをしたことが、私たちが律法の行ないをして義と認められようとしたところで、無駄にされてしまうのです。

以上ですが、パウロがこのようにして、律法に戻ってはならないという主張を行ないました。そして次回から、ガラテヤ人に対して律法に戻って行った彼らに対して、「愚かなガラテヤ人よ。だれがあなたを迷わせたのか。」という驚きから言い始めます。